

りに謝罪したが、今に及んで義鎮は赦さなかった。その夜、強盗が押入った態で「布団蒸し」で殺害した。

私は義宗が召還に應じてたどったであろう山道を通る度に、当時としては既に五十一才の高齢を迎えた義宗が

長子を連れて落葉を踏み、黙然と歩く衰れた姿を想う。義宗の墓は竹田市法泉庵に在るが、かつて小さな坂が重なるようにして続くこの墓地を訪れた時、往時を偲び、こみ上ぐる涙と共に低回去る能はざりし思い出がある。
(つづく)

杉谷遠江守宗故の墓の由来

本文 榎木野 次 人

前文 塩 月 佐 一

杉谷宗故の墓を尋ねて

塩 月 佐 一

昨年の晩秋、軸丸会員の案内で、清田副会長・染矢会

宗故の墓は、小高い杉林の中にただ一つ、高く苔むして、由緒ありげに建っていた。「佐伯氏の忠臣が、故郷を遠く離れて一人淋しくここに眠るのか」と思うと感慨無量であった。

員と編者は、遠く阿蘇外輪山の高原、波野村榎木野に杉谷宗故の墓を尋ねた。

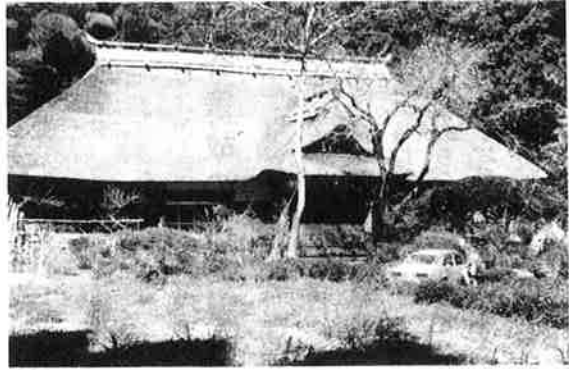
杉谷宗故のことは『大友興廢記』の巻第二に出ている。

沿道には、あちこちに取り残された柿が赤く輝き、高原はもう枯草でおおわれていた。

宗故が波野村に落ちたのは、佐伯惟勝・惟常の兄弟げんかに由来する。『佐伯市史』によると、惟勝・惟常は佐

石造物を尋ねて九州中を駆け廻る軸丸氏は、波野村もまるで我が村のように車を走らせる。

伯氏第十代惟治の兄惟信の子といわれ、この二人は仲が悪く、永正（一五〇四—一五二一）惟治が自刃をする



邸 氏 夫 不 野 木 榎

前の年号)
の頃しばし
ば私闘し、
弟惟常は敗
れて伊予に
渡ったが、
やがて周防
の大内氏に
扶持された。
大友義長
(義鑑の父)
は惟常が器
量すぐれた
武人である

ことを知り、これを召しかかえて筑後東郷に配置した。

その後大友義鑑は惟常を佐伯氏第十一代として佐伯荘を安堵したとある。

宗故の事件は惟常が筑後にいる時に起ったものである。

宗故の墓参をすませた私達は、榎木野に於ける宗故の事跡を調べるため村役場を訪ねた。あいにく土曜日の午後のことで二、三人しかいなかった。

「一番郷土史に詳しい榎木野次人先生が昨年亡くなられたので、今特に詳しい人はいませんが、せっかく遠い所から来られたのですから、榎木野不羈夫先生をたずねてみて下さい」と、家構えや道順を教えてくれた。

役場からあまり遠くない榎木野氏宅はすぐわかった。写真ではよくわからないが、実に堂々とした風格のある旧家である。一見して由緒ある家だと思った。一行はしばし歩を止めて、あきず眺めた。

再三再四戸をたたいたが声がない。戸もあかない。しかし去り難く留守の家をあこれ眺めた。ここまで来て宗故の話をきけないのは残念だったが、一行は後日を期して榎木野を後にした。

後日榎木野不羈夫氏に資料をお願いしたら、数種の資料を送って頂いた。次に掲げる一文は「広報なみの」に文化シリーズとして掲載された故榎木野次夫氏の文である。原文のまゝ掲げる。

杉谷遠江守宗故の墓の由来

榑木野 次 人

(熊本県波野村榑木野)

(はじめに)

この墓にお詣りすれば誰しもが一目で由緒あるものだと思わせる豪壮なもので室町時代の鎌倉様式とのことである。この時代に寒村の波野にかかる豪壮な、しかも最古の墓石であり宗故が偉大なる豪勇の武士であったかをしるべせる。

惜むらくは、玉垣が消失していることが惜しくてならない。戦国時代の武士の如何なるかを如実に物語っている。



杉谷宗故の墓

る。

この墓は榑木野、井の迫村にあり、杉谷の塔又は仏の塔とも称する。諸書に杉谷の祠(ほこら)とあるも祠にあらざ宗故の死後阿蘇大宮司に崇り(たたり)あり、故に大宮司が塔を建て宗故の霊を慰めたもので塔の一部に鷹の羽の紋をつけてあると言ひ伝えられている。

杉谷遠江守榑の宗故は、人皇三十一代敏達帝よりいで榑諸兄公の後裔(こうえい)にて代々豊後佐伯氏の臣で註あり宗故武芸に勝れ、且つ、魔術を心得、奇多かりしが城主佐伯惟豊没後二男佐伯次郎惟常と志を通じ、嫡子太郎惟勝にそむき佐伯を立退き肥後の国榑木野へ来り榑木野式部の許(もと)へ落ち着き寄食する。年月を送るごとに式部とも多年の誼(よしみ)をたがえず他事なく労わりもってなしけり。

宗故はあるとき家臣伊達太郎左衛門を近づけて、「佐伯に在る傍意の者もあれば、何卒相促し、相共に方便を

選び主人次郎殿を再び佐伯へ本意ならしめ、年来のうっぶんを散せんと思う。汝姿を変え忍んで佐伯に立越し相語うべし」とて廻文を笈摺（ふきゅう）の下に隠させて諸国巡礼の姿で旅立ちさせた。榎木野から程ど遠からぬ所で、阿蘇大宮司の手の者と会いしが、何となく怪しく思われ捕えて仔細を問いけるに、様々と陳防すれども謀願に廻文も奪われ、辛うじて命は助かり逃げ帰り、主人宗故に悉（ことごとく）く告げる。宗故大いに驚き一大秘の廻文を奪われては社安からじと馬を飛ばせて彼の処に馳せ行き一人も逃さじと数十人の中に面も振らず切り入り、散々に相戦う、杉谷元来剣術に秀れたれば近づく者を唐竹割、胴切り、袈裟掛けに切り散し、廻文を持ちたる男を足にて蹴倒し、廻文を取り返し帯をつかんで差し上げ右手の深田にエイと打ち込めば、残党共は身を震わして右往左往に逃走する。

宗故打ち笑い、用にもたため輩（やっぱら）であたら骨を折らしたとて馬に打乗り榎木野の宿所に帰りける。

阿蘇大宮司惟豊激怒し、小国、坂梨、矢部の武將に手の者共を引きつれさして、榎木野に押し寄せ閔を作り攻めかける。

榎木野式部、杉谷に向い「一樹一河も他生の縁、某（それがし）命にかけても宗故と名乗り打死にすべし。とくと落ち行かるべし」と言えば杉谷「聆（よわい）にて御芳志による数年の寄宿の御厚意のみならず、只今の御厚情、万々忘却いたすまじく、いささかでも逃れたとしても未代に瑕増を残すより潔（いさぎよ）く、討死すべし。某、切腹するに仔細あらん」と用意をなす。

宗故に男子二人あり。嫡子萬寿丸は豊後佐伯に残し置き、二男千寿丸は父と共に榎木野に在りしかば、宗故千寿丸を呼びつけて、髪をかきなで、汝幼なかりとも父が末期の一言なり。心を留めて聞くべし。我今死の場に至り、生涯を遂げ、君恩に報いんと欲す。功は忠を謁（えつ）し、忠にて命を捨てると言う。争いが命を惜むべき、汝は父のそばにありて最後の練波（しゅうは）を惜めども兄萬寿丸は佐伯に在りて、父が最後を知らず。元前世の宿命にて今始まった事でなし。汝篤（とく）と父が忠孝に依って賞録厚く褐すべし。必ず命を完うするよう。と千寿丸を榎木野式部にとくと金打（きんちよう）してゐる。千寿丸は父の袂（たもと）に取りすがり、ものも言わずに涙を流し、引く袖を心強く振り払い「汝は未練

なく哀みを乞う事勿れ」と言い捨て敵陣に馳せ向う。

「今此の騒動に及ぶ事、榎木野式部の所為にあらざ。豊州佐伯の住人、杉谷遠江守宗故がなさる所なり。他人の然成る事。我本陣前にて生涯を遂ぐるなり。汝等見習い武士の手にせよ」とて九寸五分の脇差にて腹十文字に掻き破り腸を摘み出して「血を以て軍神の血祭とせよ」と齒がみをなし立ちたるは、身の毛もよだつて震えたる寄手の勢これを見て、大剛杉谷が腹を切るのを見よう群だつて乱れよる。宗故きつとにらみ、「用にもたぬうじ虫ばら。我に近づき手を掛ければ七代まで取り殺さん」とはつたとにらんで見廻せば恐怖に震いあえて近づく者なし。寄手の大将小国又四郎進みよりて首を打撃つたが倒れず、小国又四郎は心身愾乱して十日を過ぎず狂死しけり。宗故の介措を定めざりしは、斯るべきことを恐れたるなり。

千寿丸は母と共に宗故死後まで榎木野に在り。我が子を惣領にしたてんと思ひ榎木野式部に頼み、筑後前飾にある佐伯次郎惟常に嫡子なりと披露する。惟常、宗故が忠死に感状を与える。

註2

「感状」

父遠江守宗故名世他州榎木野欲立我拾本国策之満及切腹之時無比類古今所稀之萬々一遂本直拾吸佐伯

□宗故本欲無相透可以者也

仍状如件

大永七年十二月八日

惟常判

杉谷千寿丸殿

この墓石の前面に杉谷遠江守宗故墓。右に大永二年、左に十二月八日とある。残る三面に次の如き碑文がきざまれていたが風化のためほとんど読みとれない。

「碑文」

杉谷遠江守宗故者豊後佐伯家の臣也。佐伯惟勝与其弟惟常戦惟常敗走出據放筑後東郷宗故□与惟常潜出其国末子後肥後波野郷依其郷豪榎木野式部大夫者密劔復使惟常於佐伯乃令其家士伊達某者陰為道士之装取其党与时阿蘇大官司遊騎到波野伊達与之遊騎怪之探其笈奪其密移伊達返告之宗故大怒悉斬其遊騎大

宮司間之□大怒發兵來討宗故奮日募何敵象足吾到死
之秋也然吾忠魂豈与木同朽哉健闘數人而昏自刃矣宗
故死後未十日敵將小国又四郎其部下悉死蓋其靈為山
宗云大宮司因建碑於所禪杉谷社祭之今雉絶其祭有人
信而禱之者則治病禳妖云

惟時元治二年次乙丑再議建立

(現在碑文は風化がひどく判読しにくい)

註 榑木野氏は、どんな文献によりこの文を書いた
かわからないが、『大友興廢記』には次のように

なっている。

注₁ 惟常は、第十代の城主佐伯惟治の兄、惟信の三男
である。

注₂ 感状は次のような文である。

父遠江守宗故。乍在肥州榑木野。欲立我於本国。
策已漏。及切腹之時。無比類働。古今所稀也。萬
一遂本望。於歸住佐伯者。宗故本領無相違。可充
行者也。仍狀如件。

大永七年丁亥十二月八日 惟常 判

杉谷千寿丸殿

佐伯地方の石塔

(二)

五十川 千代見

(会員・弥生町提内)

役行者石像

役小角(えんのおづの)が正式の名で七、八世紀のあ
いだ大和葛城山にいた呪術者で行優婆塞(えんのうばそ
く)神変大菩薩と呼ばれている。役行者の伝説の中に説

かれる超人的な行動は、密教を基盤として発展し修験道
の中にとりいれられた。

その像容は木の葉を綴り合わせた衣服をまとい頭巾(と
きん)をかぶり、右手には錫杖、左手に経巻あるいは鉄